新刊紹介

紅野謙介・大木志門編『21世紀日本文学ガイドブック⑥　徳田秋聲』

安井海洋

本書は徳田秋聲の経歴と作品の特徴、ならびに研究の最新動向をまとめた入門書である。「21世紀日本文学ガイドブック」シリーズの趣旨文が標榜する通り、想定する読者層は中学・高校生から研究者までと幅広い。従来は「自然主義作家」としての秋聲というイメージが先行していたために、彼の自然主義・私小説系の作品に関する研究は深化していったものの、それ以外のテクストが議論の俎上に載ることは希であった。しかし、二〇〇六年における八木書店版『徳田秋聲全集』全四三巻の完結を境に、秋聲研究は一転機をむかえる。以前は論及される機会の少なかった随筆や通俗小説などが明るみに出されたことで、秋聲のもつ新たな側面が示唆されたのである。こうした今後の進展が望まれる状況において、本書の刊行は時宜を得たものといえよう。

本書は「第一部　作家を知る」と「第二部　テクストを読む」の二部構成をとる。本書の編者でもある紅野謙介氏と大木志門氏が担当する第一部は、秋聲の経歴、作品案内、研究テーマの提案（以上、紅野氏）、先行研究ガイド（大木氏）をおさめる。なかでも特筆すべきは研究テーマの提案と研究ガイドであろう。前者は、自然主義作家としての徳田秋聲という一面的な作家イメージを覆す、多種多様な秋聲像を描き出している。たとえば明治三〇年代、文筆活動の出発期において、秋聲は英米文学やその他言語による作品の英訳をもとに多数の翻案作品を発表していた。外国文学との接触の体験が彼の創作に与えた影響に関しては、今後いっそうの研究が必要である。そして後者は秋聲に関する先行研究の動向をまとめたものであり、単に題目と掲載媒体、掲載時期のみを列挙しただけの文献リストにとどまらず、筆者が各文献への評価にまで踏み込んだ内容となっている。秋聲研究史を通時的に展望したガイドの発表は約三〇年振りであり、今後この作家を論じる際には必ず参照される論考のひとつとなるだろう。

続く第二部は大木氏を含めた五名の論者による秋聲研究の実践編である。大杉重男氏は『新世帯』、『黴』、『爛』などの代表

的な新聞連載小説に、高浜虚子や夏目漱石といった編集者の介入の痕跡を読みとる。小林修氏は短篇「ファイヤ・ガン」の消火器をめぐる喜劇が実は関東大震災時の流言に対する秋聲の皮肉を内包していたことを実証する。大木氏は「自然主義」、「私小説」のキーワードで語られる機会の多い秋聲が、明治四〇年代に初めて「自己表象テクスト」を確立するまでの過程を主に文体の観点から再現する。梅澤亜由美氏は近代小説のもつ物語構造を相対化する『黴』の語りの実相を明らかにする。西田谷洋氏は短篇「花が咲く」のリアリズムを支えるレトリックに分析を加えることで、その裏に隠蔽された女性人物の声を聴きとる。

本書が提示した徳田秋聲をめぐる論点は、新聞メディア、通俗小説、代作、翻訳と翻案、文壇、リアリズム、自己表象、災害、盛り場、政治家との交流、ジェンダーなど、実に多岐にわたる。明治、大正、昭和戦前、戦中と近代を丸ごと蔽う年月を生き、晩年まで多くの文学者との関わりを保っていた秋聲は、いわば近代文学史の結節点ともいうべき人物だったのである。本書の最大の功績は、未解明の部分が少なくない秋聲という研究の沃野を、多くの読者に向けて開放した点にある。

（二〇一七年二月二〇日　ひつじ書房　二五二頁　二〇〇〇円＋税）

（やすい・みひろ　名古屋大学大学院生）